



TITLE:

序

AUTHOR(S):

岩尾, 一史

CITATION:

岩尾, 一史. 序. チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開 2018: 1-4

ISSUE DATE:

2018-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235447>

RIGHT:

序

本論文集は京都大学人文科学研究所の共同利用研究班 A「チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究」（平成27年度-29年度）による研究成果の一部をもとに構成されている。本研究班はチベット学の研究者たちが中心となって各分野の最新の研究成果を互いに紹介・検証することを大きな目的とし、2015年4月にスタートした。より具体的には、次のような目的を掲げていた。

チベット・ヒマラヤ地域と周辺諸文明との間における歴史的交流を通じて伝播したと考えられる社会システム・宗教・儀礼・言語などの交流史の諸相に関する研究成果を本共同研究班で学際的に集積し、それによってチベット・ヒマラヤ地域の文明の史的展開を多角的に分析し、ユーラシア世界におけるその位置づけの再評価を行なう。

7世紀以降、チベット・ヒマラヤ地域は周囲の先行文明の影響を受けつつ、独自の文明を展開させてきた。11～12世紀に仏教を完全に消化して以降、より強固となったチベット文明は周辺文化と交流を繰り返しつつモンゴル～東アジアにその影響力を伸張させた。さらに20世紀半ば以降もその発信力は欧米社会までにも影響を与えている。このような発信力と柔軟性をチベット文明は如何に獲得したのか、また周辺諸文明とどのように相克・調和してきたのか。その具体像を探るべく、多様な視点からチベットと他文明との相互接触の諸相を学際的に分析する。

このようないささか大仰な目標を掲げつつ、チベット学に関わる様々な分野の研究者を集め、2015年より以来3年間にわたり一月に一回のペースで研究会を開き、研究発表と討議を繰り返してきた。しかし、なぜこのような研究班を企画するに至ったのかについては、チベット学の現状と少なからず関連しているので、簡単に説明しておきたい。

チベット学はそれ自体が長らく研究関心を集める研究分野である。例えばヨーロッパにおけるチベット文明自体への関心は、遅くともハンガリーのチョーマ・ド・ケレス（1784-1842）にまで遡ることができるし、また長らく「秘密国」であったチベットはエキゾチックな魅力をまといつつも地理学、仏教学、民俗学といった学問的分野の関心事でもあった。そして20世紀半ばに中華人民共和国がチベットを支配すると、皮肉にも流出した大量の稀覯書や亡命

チベット知識人たちの尽力により、チベット学が一気に進展することになった。

チベット学への関心は近年に至っても高まるばかりであり、三年に一度開催される国際チベット学会（International Association for Tibetan Studies）への参加者は回を追うごとに増加し続けている。また各国においてチベット学専門の研究所も設立されており、アメリカのヴァージニア大学チベットセンター、オーストリアのウィーン大学チベット学仏教学研究、中華人民共和国の中国蔵学研究中心など多くの研究機関が存在する。

日本においてもチベットへの関心は高く、1877年に小栗栖香頂『喇嘛教沿革』が出版され、20世紀はじめには「入蔵熱」が起り、困難をおかしてチベットに入り滞在した日本人たちも登場した。そうした入蔵者の河口慧海、多田等観、青木文教たちによって日本のチベット学の基礎が築かれ、現在でもその学統が引き継がれている。

ただしヨーロッパ、アメリカや中国と比した場合、日本におけるチベット学には1つの特徴がある。それは、日本の大学機関においてチベット学が独立の研究部門を形成していないということである。今から17年前に書かれた文章を引用しておこう。

最後に、将来チベットの専門的研究を志すひとに対して、老婆心ながら一言。先ほど述べたように、日本の大学や研究機関では、チベット学は独立の部門を形成していません。だから研究者としてチベットだけではなかなか食っていけず、兼業・出稼ぎ、その他もろもろやる覚悟がいることになります。

武内紹人「連載・チベット語のすすめ（6）」『月刊言語』第19巻第10号（1990年）112頁

1990年に書かれた文章だが、今でも状況は変わらず、チベットの研究を志す者は、基本的に自分の研究関心に合わせて仏教学、歴史学、言語学、文化人類学、美術学などそれぞれの学問体系を選び、その学問体系の中で自分の研究を続けることになる。とにかく、チベット学だけでは「食えない」のである。

もちろんこのことは悪い面だけではない。日本のチベット学の学問的成果は実質的かつ着実である点において国際的な定評があるが、これは分野ごとの学問的支柱を確固として有していることと無関係ではないだろう。しかし同時に、分野ごとに独立していることにはまた、異分野間の学術的交流を生じさせにくいというデメリットがある。意識的に交流をしようとするのでもない限

り、異分野のチベット学研究者同士が顔をあわせる機会は、年に一度開催される日本チベット学会か、先ほど述べた国際チベット学会程度のものである。

その一方で、続々と出版されるテキスト資料や考古学的発見、続々と報告されるフィールド研究の成果、また各国で出版されるチベット学関連の論文や書籍の点数は今や膨大なものである。それらはとても一人の研究者が対応できる情報量ではなく、好むと好まざるに拘らず、もはや異分野交流をせずにいられない現状が厳然として存在している。このような状況が続くと、チベット学の異文化交流の場が少ない日本が、必然的に世界のチベット学の趨勢から遅れをとる可能性も出てくるのである。

本研究班の構想は、以上のような問題意識から生まれてきた。異分野の研究者の学術的交流の第一歩として研究班を企画し、平成27年度京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点共同研究プロジェクトの募集に応募したのであるが、幸いにして採択されて実現の運びとなった。なおこの企画は筆者の力のみで出来上がったものではなく、池田巧氏（京都大学人文学研究所教授）ならびに小西賢吾氏（金沢星稜大学講師）と西田愛氏（神戸市外国語大学客員研究員）の多くの有益なアドバイスによるところが大きいことを申し添えておく。

本書所収の論文は、研究班における研究報告とその後の議論を元にして書かれたものである。ただし研究班での研究報告が全て論文になったわけではないので、より正確には論文選集というべきものであるが、それにも拘らず、目次を見ればすぐにわかる通り本論文集は一つのテーマを中心として編まれたものではなく、通読的な書物にはなっていない。内容的にもバラバラであり、その点においては論文の寄せ集めであるとの誹りを免れ得ないやもしれないが、研究班の成果と、また現在の日本のチベット学の最前線を知るにはむしろこの形式の方が妥当であろうとの判断で公刊に至った次第である。

最後に、各論文の元になった研究報告が行われた期日を、念のために記しておこう（会場は特に記さない限り京都大学人文科学研究所にて開催）。

岩尾一史論文：2015年5月23日

山本明志論文：2016年3月19日（立教大学）

池尻陽子論文：2016年10月15日

岩田啓介論文：2017年5月20日

小松原ゆり論文：2016年5月21日

Kobayashi Ryosuke (小林亮介) 論文：2016年 7 月 9 日
大川謙作論文：2015年 6 月20日
別所裕介論文：2015年11月21日
山本達也論文：2015年10月10日
長岡慶論文：2016年 6 月11日
小西賢吾論文：2016年 3 月19日 (立教大学)
根本裕史論文：2016年 9 月17日 (東京外国語大学)
加納和雄論文：2017年 7 月15日
熊谷誠慈論文：2016年11月26日
西田愛論文：2016年 3 月19日 (立教大学)
Iuchi Maho (井内真帆) 論文：2017年 3 月19日 (神戸市外国語大学)
星泉論文：2018年 3 月17日
海老原志穂論文：2016年12月17日
Onoda Shunzo (小野田俊蔵) 論文：2015年 4 月18日
Ikeda Takumi (池田巧) 論文：2017年10月21日

岩尾 一史